

富山県 福岡町

下老子笹川遺跡発掘調査報告書

1998年3月

福岡町教育委員会



平成9年度 下老子芭川遺跡 調査地遠景（東から）



出土遺物 天王山式系統の土器と櫛描文土器

序

福岡町は、北東に流下する小矢部川を境界にすると、古代以来の街道筋である山麓地区と右岸の平野部に分けることができます。左岸の丘陵には多くの古墳が存在しており、古墳群を形成しています。この中には県指定史跡である城ヶ平横穴古墳群があります。また、右岸の平野部には、1586年の天正地震で崩壊した県指定史跡の木舟城跡があります。こうした多くの遺跡は、この地域が古くから交通の要所として栄えていたことを物語るものです。

このたび、個人住宅建築に先立ち発掘調査を行った下老子篠川遺跡は能越自動車建設に伴う調査により発見されたものです。今回の調査では、東北地方との文化交流を示す土器が出土しております。

このように、遺跡は地域の歴史の解明に極めて重要な役割を果たしますが、その一方には、一度発掘してしまうと二度と元に戻らないという事実があることも考えなければなりません。この報告書が、地域の歴史の解明に役立つことは勿論のこと、埋蔵文化財に対する保護意識の浸透に少しでも役立つことが出来れば幸いです。

終わりに、この調査を行うにあたり、ご協力を頂きました地元の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

福岡町教育委員会
教育長 谷 崎 嘉 悅

例　　言

- 1 本書は富山県西砺波郡福岡町下老子地内に所在する下老子篠川遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は個人住宅建築に先立ち、福岡町教育委員会が実施した。調査の実施にあたっては、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。また、調査費用は福岡町教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
- 3 調査事務所は福岡町教育委員会生涯学習課におき、文化財保護主事栗山雅夫が調査事務を担当し教育次長吉国修一が総括した。また、調査にあたっては福岡町シルバー人材センターの協力を得た。
- 4 調査期間・調査面積は次のとおりである。　調査期間 平成9年5月15日～6月10日　　調査面積 200m²
- 5 試掘調査・発掘調査担当者は次のとおりである。

試掘調査 平成8年度 担当者 福岡町教育委員会	文化財保護主事 栗山雅夫
富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事 越前慶祐
本調査 平成9年度 担当者 福岡町教育委員会	文化財保護主事 栗山雅夫
- 6 資料の整理、本書の編集と執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て調査担当者が行った。
- 7 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から援助を頂いた。記して謝意を表したい。

赤澤徳明・上野章・越前慶祐・大平奈央子・岡本淳一郎・久々忠義・斎藤隆・酒井重洋・島田修一・高梨清志・根津明義・宮崎順一郎（五十音順・敬称略）

また、附章では出土上器について石川日出志氏に玉稿を頂いた。深く感謝の意を表したい。
- 8 本書の土色の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著 1994版『新版標準土色帖』に準拠している。
- 9 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - (1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。
 - (2) 基準杭は調査区南側に隣接する建物との境界に沿って任意に基準点を設定した。なお、基準杭のX軸は磁北から8°14'7" 東へ偏る。
 - (3) 遺構の表記は次の記号を用いた。溝：SD ピット・柱穴：SP
 - (4) 出土遺物の縮尺は、図版下に示した。写真図版の縮尺は、原則として土器が1/2、石器が2/3とした。
- 10 出土品及び記録資料は、福岡町教育委員会が保管している。

本　　文　　目　　次

序 文	
例　　言	
目　　次	
I　　遺跡の位置と環境	1
II　　調査の経緯と経過	2
1. 調査に至る経緯	2
2. 調査の経過	3
III　　調査の結果	4
1. 地形と層序	4
2. 遺構	4
3. 遺物	6
4.まとめ	11
附章 下老子篠川遺跡の天王山式土器	15

挿図・図版目次

第1図 地形と周辺の遺跡	1
第2図 試掘調査位置図	2
第3図 本調査区割図	3
第4図 遺構断面図	4
第5図 遺構配図	5
第6図 出土遺物実測図	7
第7図 出土遺物実測図	8
第8図 山上遺物実測図	9
第9図 出土遺物実測図	10
第10図 大正10年作成地籍図	13
写真図版	

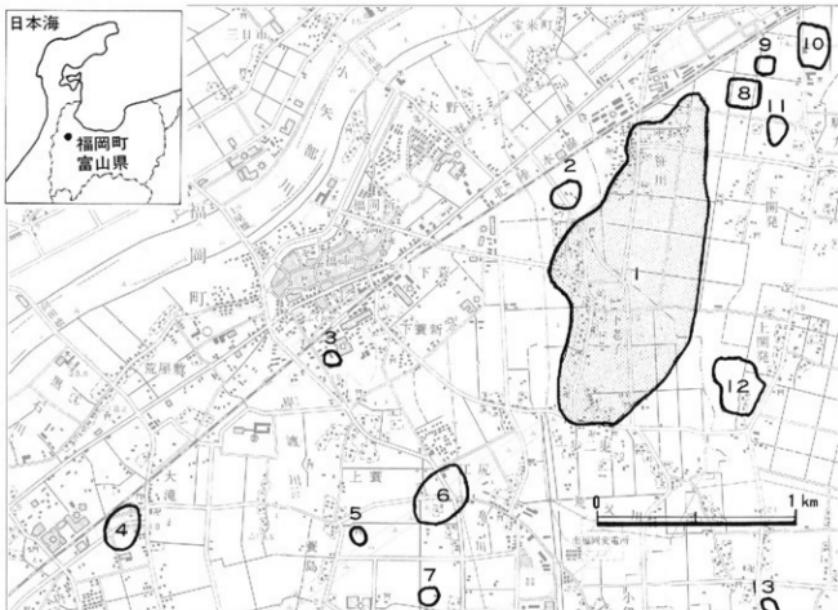
I 遺跡の位置と環境（第1図）

本書で報告する下老子笹川遺跡は富山県西砺波郡福岡町下老子地内と同県高岡市 笹川地内にまたがって所在している。

富山県は県中央部にある呉羽丘陵を境に東西に二分され、それぞれ「呉東」「呉西」と呼ばれている。福岡町は後者に属し、県の西端部に位置する。町域は東の平野部と西の丘陵部に大別される。このうち、平野部は小矢部川と庄川によって形成された複合扇状地の扇端部で砺波平野の北西端部に位置する。丘陵部は、宝達山を主峰として能登半島に連なり、石川県と接しており、町の総面積の4分の3を占める。

町内の遺跡をおおまかにわけると、町西側の丘陵部に旧石器～縄文時代後期の遺跡が点在し、平野部には縄文時代晩期から近世に至る遺跡が広がっている。特記する点として、平野に面する丘陵部には古墳時代後期を主体とする古墳群や、中世の山城がある。また、古代の北陸道は、この丘陵の山裾を通って、高岡市伏木にあった国府に通じていたとされている。丘陵部の主な遺跡には、上野A遺跡（縄文時代前期・中期・古墳時代）、城ヶ平横穴墓群（古墳時代後期）、鶴城跡（中世）などがある。また、平野部の主な遺跡には、石名田木舟遺跡（弥生時代・古代～近世）、江尻遺跡（古墳時代・中世～近世）がある。

下老子笹川遺跡は小矢部川右岸の平野部に位置し、弥生時代後期を主体とする縄文時代晩期～近世の複合遺跡で、平成3年に能越自動車道の建設に伴う調査により発見されたものである。平成8年度に行われた発掘調査では、今回の調査対象地の約200m東で県内最古となる弥生時代終末期から古墳時代中期の水田や、弥生時代終末期の周溝をもつ建物跡が検出されている。また、平成9年度の調査では、国内最古となる弥生時代後期の「水盛り」が出土している。



第1図 地形と周辺の遺跡（1／25,000）

1. 下老子笹川遺跡 2. 下老子北遺跡 3. 宝性寺塚 4. 大池遺跡 5. 袋島遺跡 6. 江尻遺跡
7. 矢木北遺跡 8. 高田新西後遺跡 9. 高田新芽道遺跡 10. 立野地頭田遺跡 11. 南方遺跡
12. 上岡発遺跡 13. 油屋寺田遺跡

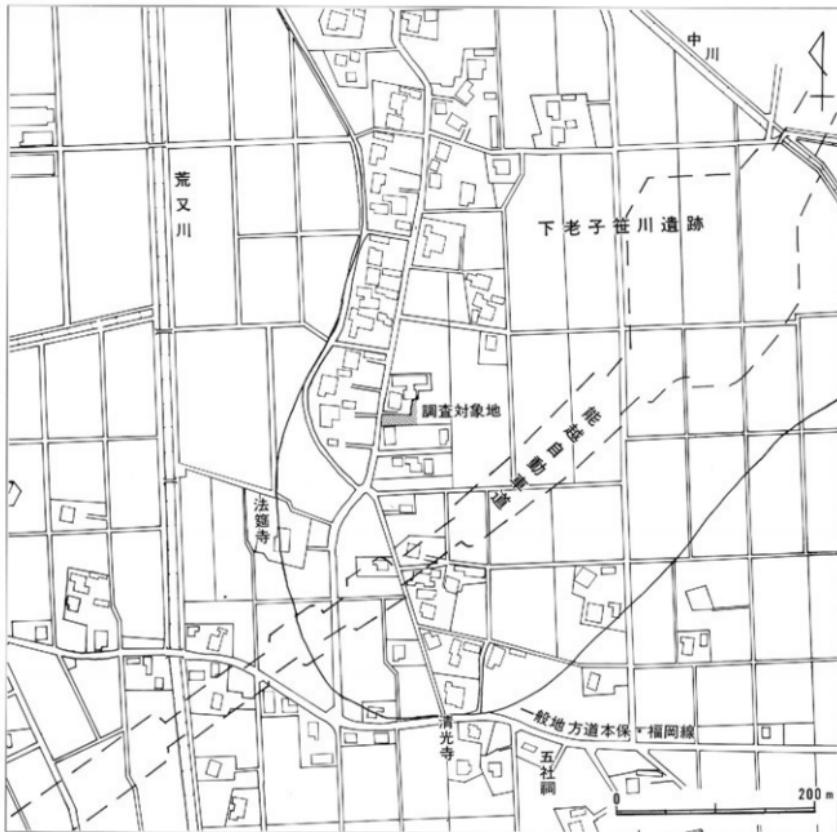
II 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯（第2図）

平成8年11月、個人住宅建設に伴い農地転用の申請が提出された。申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である下老子篠川遺跡内に位置することから、福岡町教育委員会は事前調査が必要である旨を通知し、申請者と協議を行い土地所有者の承諾を得て造成工事前に試掘調査を行うこととなった。

試掘調査は同年12月に行い、調査の結果、柱穴・土杭等の遺構と弥生土器・瀬戸美濃等が出土した。申請地に遺跡の遺存が確認されたことから申請者と協議を行い、住宅建築部分である200㎡を対象として本調査を行うこととなった。

本調査は福岡町教育委員会が国庫補助金の交付を得て平成9年5月に実施することとなった。



第2図 試掘調査位置図 (1/5,000)

2 調査の経過（第3図）

現地調査の前に、事前準備として近くの水準点を利用して仮BM(19.0)を調査地内に設定した。

このあと前年度に実施した試掘調査を結果をもとに、調査対象面積である200m²の表土除去を重機でおこなった。

次に調査地の地形に合わせて任意に基準杭を設け、2m×2mを一区画とした。基準杭は隣接する住宅との境界に沿って任意に起点を設定し、座標軸は南北をX軸、東西をY軸とした。なお、X軸の方向は磁北から8°14'07" 東へ偏る。

その後、人力による遺物包含層の掘削、遺構精査、遺構掘削を行い、統いて図化・記録作業を行った。また、出土遺物は現地で水洗いし、現地調査終了後、整理室で注記等を行った。

それぞれの遺構については調査員が写真撮影を行ったが、調査地の全景写真はラジコン・ヘリコプターにより撮影した。

調査期間は平成9年5月15日から平成9年6月10日（実働日数14日）までである。

平成9年5月15日 表土除去、基準杭設定

5月16日～21日 遺物包含層掘削

5月22日～26日 遺構精査

5月28日～6月2日 遺構半裁、遺構断面図作成

6月4日 遺構完掘

6月5日 調査地全景写真撮影

6月9日～10日 遺構平面図作成



第3図 本調査区割図 (1/500)

III 調査の結果

1 地形と層序

下老子篠川遺跡は、庄川と小矢部川によって形成された複合扇状地の扇端部に位置し、約1.9㎢の面積を有している。標高は17~19mを測り、北東に向かってゆるやかに傾斜している。このうち福岡町域の下老子地内では、微高地に現在の集落が立ち並んでいて、西側は荒又川が流れ、東側の後背湿地には水田が広がっている。荒又川が現在の姿となったのは昭和26年に完成した河川改修以後で、以前は第10図(13P)にあるように蛇行して流れていた。また、集落の東側に広がる平坦な水田地形は昭和38年に行われた耕地整理によるもので、それ以前は所々に谷部があつて氾濫が繰り返されていたことが判明している。今回の調査対象地は、現在の集落内=微高地上に位置している。

基本層序は①層：オリーブ黒色シルト、①-II層：にぶい黄褐色シルト質砂上、②層：黒色シルト、②-II層：黒褐色シルト、③層：灰オリーブ色砂質シルトの順に堆積する。このうち①・①-II層は耕作土、②・②-II層は弥生時代後期の遺物包含層、③層上面が遺構検出面（地山）である。また、噴砂がX 2 Y 7付近で検出されたが、上面が存在しないため所属時期は不明である。

調査地付近は耕地整理の際に削平を受けており、弥生時代以降の遺物包含層は遺存しない。また、②層と②-II層から出土した土器が接合することから、この2層は同時期のもので時期差はないものと考えられる。中近世の陶磁器については、①層から②層上面にかけて出土しており混入によるものと考えられる。また、遺構は②層から掘り込まれている。

2 遺構

調査によって検出した遺構は溝2条、ビットである。

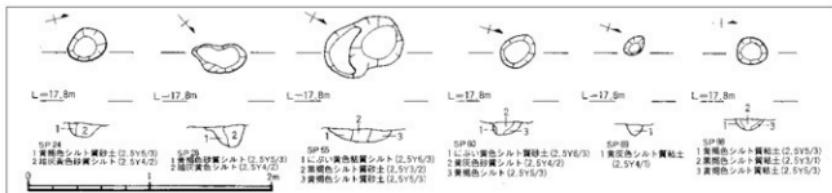
(1) 溝

S D01は南東から北西方向に流れるもので①層下面から掘り込まれている。弥生土器が出土するものの、流れ込みであり、耕地整理前に存在していたものである。

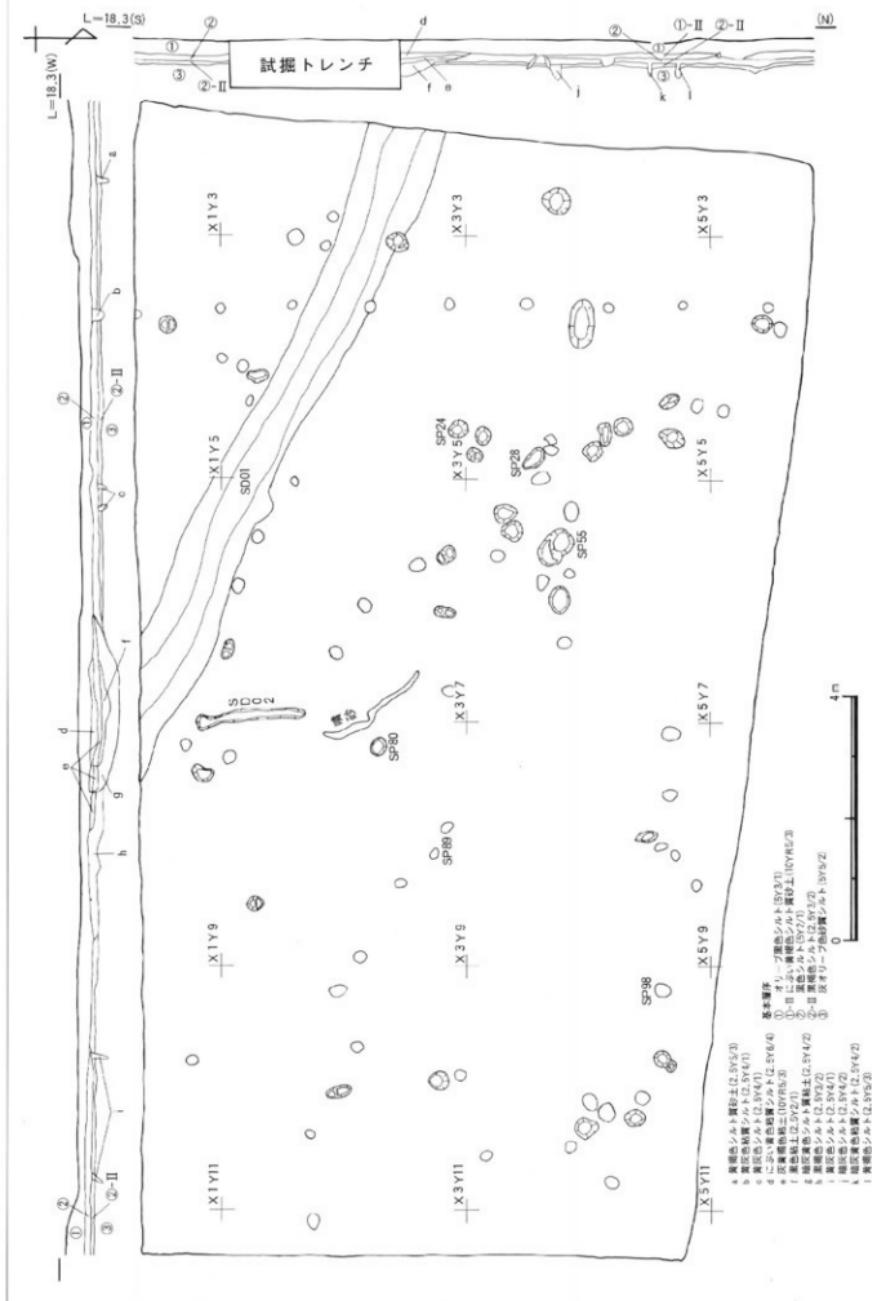
S D02は所属時期は不明であるが、溝の底部を検出したものであることから、比較的新しいものと思われる。

(2) ビット

削平により、大半のビットは深さが20cm前後と浅く、建物を構成する柱穴は検出されなかった。また、遺構内からの出土がほとんど無いことから、それぞれのビットの時期については不明である。しかしながら、覆土からは、砂質分が多く灰色もしくは褐色を呈するものと、粘性が強く黒褐色のものがあり、3種類のビットが確認できた。分布傾向としては、X 3 Y 5付近に古いものが集中し、調査地北東に比較的新しいもの（近世以降）が集まっている。また、Y 3.5付近で南北方向に1間おきに並ぶ杭列は、ハサの跡で新しいものである。



第4図 遺構断面図 (1/40)



第5図 遺構配置図 (1/80)

3 遺物

出土した遺物は弥生土器、石鐵、剥片、瀬戸・美濃、越中瀬戸、伊万里である。弥生時代の遺物は厚さ20cm程の②・②-II層から出土している。弥生土器はX 4 Y 5からX 2 Y 10にかけて帶状に分布し、特にX 3 Y 7とX 4 Y 5付近でまとまって出土する。土器片は、隣接するグリッドどうしで接合するものが多い。また、土器の大半が天王山式系統の土器で占められていることと、当遺跡内の発掘調査成果から②・②-II層は弥生時代後期の遺物包含層と判断している。器種の識別については、小破片が多く明確にできないものが多い。図化した遺物は、石器5点、土器45点である。

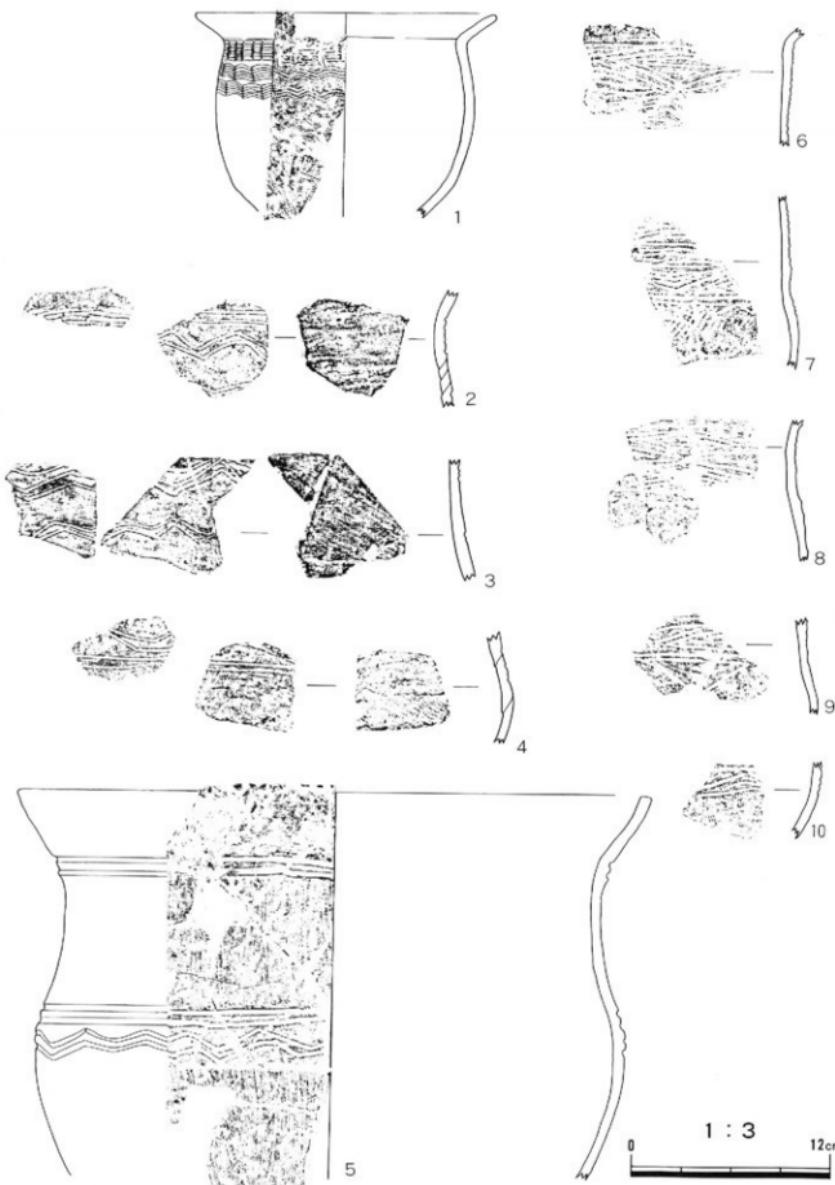
1は弥生時代の小型甕で輪描文をもつ。口径は18cmを測り、口縁は「く」の字形に外反する。文様は、胴部上端に6条の簾状文を内回りに、その下に5条の波状文を2帯右回りに施す。波状文は、1山単位で施している部分がみられ、鋸歯文に近い形態をしている。調整は口縁部と内面にヨコナデを施す。煤・炭化物は口縁部内面と頸部下に多く付着する。時期的には、弥生中期に帰属するものである。

2~45は天王山式系統の土器である。2~4は同一個体で甕の頸部～胴部分である。文様は、口縁部界に2条の平行沈線、その下に2条、3条、2条の波状文、頸胴部界に2条の平行沈線を施す。内面調整は、頸胴部界の平行沈線を境に、上部がヨコナデ、下部がナメ方向にナデしている。煤・炭化物はすべて外面に付着している。5は大型の甕で口径は38cmを測る。口縁が外反し、胴上部がふくらむ器形で、口縁部界に2条の平行沈線、頸胴部界に2条の平行沈線と2条の波状文を描く。また、頸部と胴部は下から上に向けてハケメ調整がされている。ハケの1単位の幅は1.5cm程である。煤・炭化物は外面にのみ付着する。破片はX 3 Y 8・X 4 Y 8を中心X 3 Y 6のものと接合する。6~9は幅広の沈線(3~4mm)で重菱形文を描くもので、内面をヨコナデし、煤・炭化物は外面に付着する。6・7、8・9はそれぞれ同一個体の甕である。6・7は口縁～胴部で、文様は頸部の重菱形文から頸胴部界の波状文を経て胴部の縄文へと変化する。8・9は甕の頸部にあたる部分である。

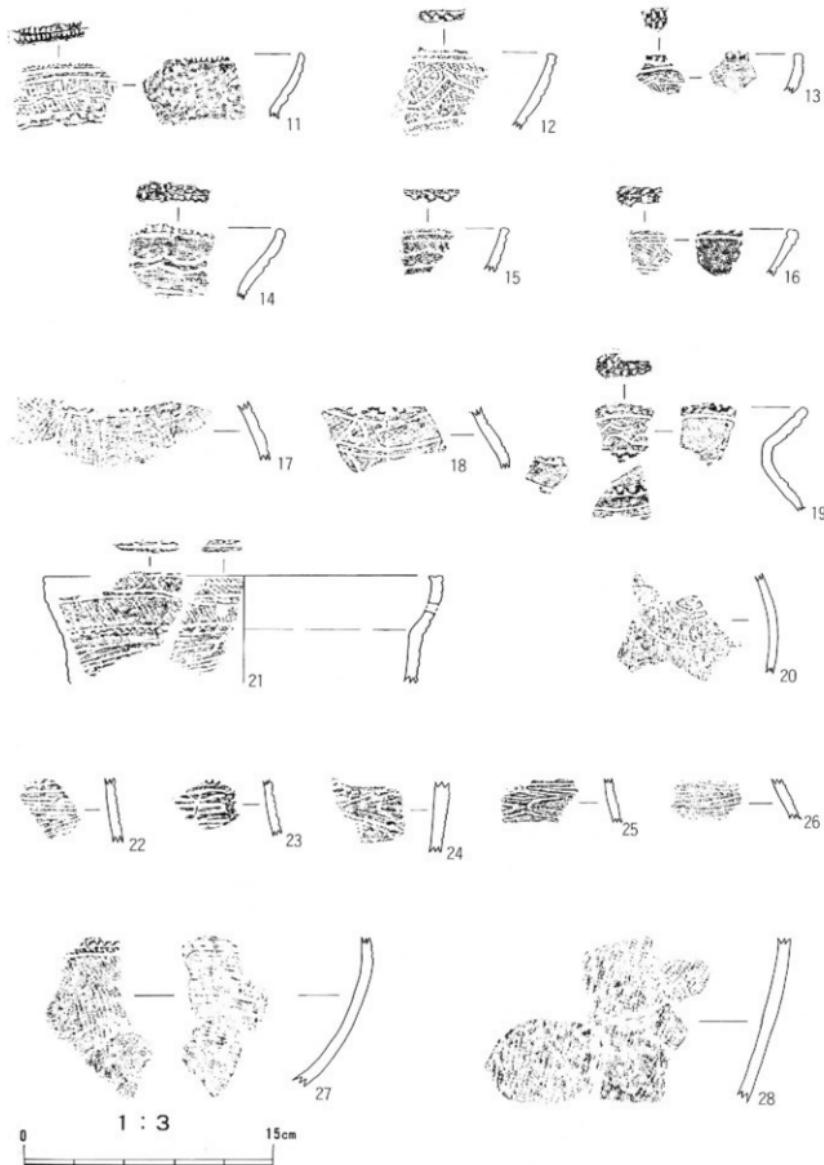
11・17~19・21・22・23・27は交互刺突文が施される。交互刺突文には、浅く大きいもの(11・18・22)、深く小さいもの(17・19・21・23・27)があり、太くて先端が丸いタイプと、細くて先が尖がるタイプの2種類の工具が使用されている。胴部に交互刺突を施すのは27で、これ以外は口縁から頸部にかけて施される。17~20が壺である。21~25は幅狭の沈線(1~2mm)で重菱形文を描くものである。23・25の重菱形文は工字文状を呈する。11~16・19・32は口縁部に刻み目をいれる。口唇に対して横から刻みを入れるのが11~16・19で、32は口唇に対して直上から刻み目を入れる。このうち、11・13・14は口縁内外面に縦の刻み目をいれる。12は口唇中央寄りに斜めの刻み目を入れる。胎土は石英を多く含み焼成は悪い。15は口縁外側に丸みをもつ刻み目をいれ、口唇に縄文を施す。16・19は口縁内外面に斜めの刻み目をいれ、内面の刻み目の下に1条の沈線を巡らす。19・32は口唇に小突起をもつ。20は19と同一個体で赤彩されている。21は1条の沈線を口唇に巡らす。平行沈線と交互刺突に挟まれた縄文部には、直径7mmの穿孔が外面から開けられている。33~35は底部である。33はミニチュア土器で丸底のものである。34・35は外面に縦走する縄文を施す。煤・炭化物が付着しているのは、11~16・21~27・30・32・34である。

36・38・39は口唇に縄文を施す。36は口縁内面に「ハ」の字形を連続させた刻み目をもつ。37は口唇にナメ方向の刻み目をもつ。口縁部は一度外反したあと内傾する。口縁の最大径部分には、左手による爪彫文が1cmおきに施され、これを境に上部に斜走する縄文、下部に縦走する縄文を施す。40は沈線で囲まれた眼鏡状の文様を3条の山形文の一番上にもつ。41は甕で口縁部に3条の山形文を施す。縄文は口縁全面に施すが、頸部は平行沈線を横断する沈線を境に施文部と無文部にわかれる。煤・炭化物は36~39・42・44・45に付着する。

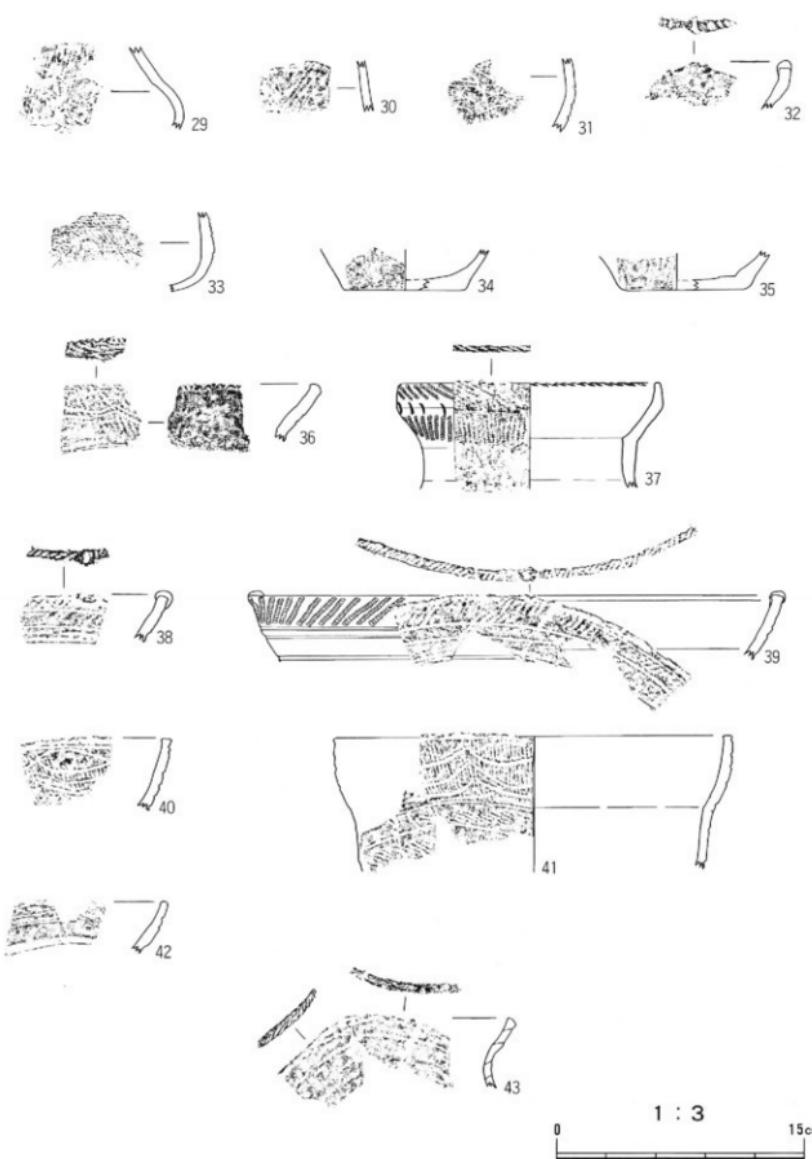
46~50は石器である。46は凹基有茎の石鐵で逆刺をもつ。石質はチャートで濃緑色を呈し、重量は8.5gである。47は石鐵未製品である。石質はチャートで重量は10.7gである。48~50は剥片である。石質は49が安山岩、50が頁岩である。重量は48が10.4g、49が22.8g、50が47.4gである。



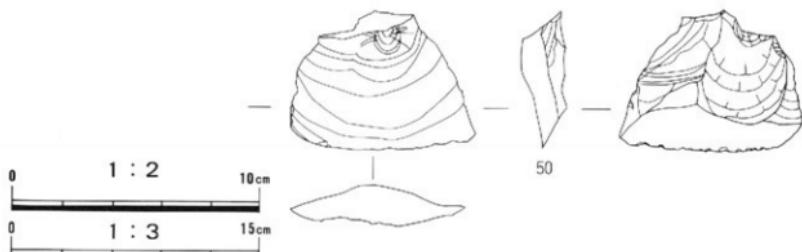
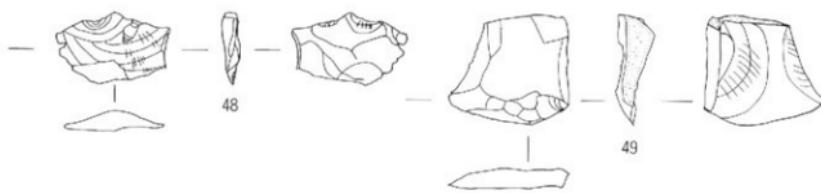
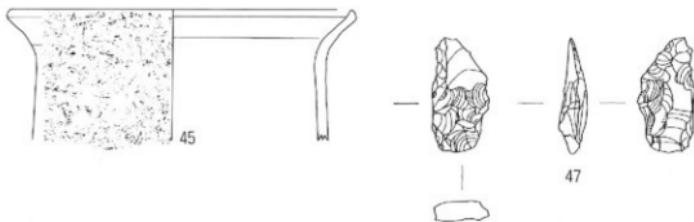
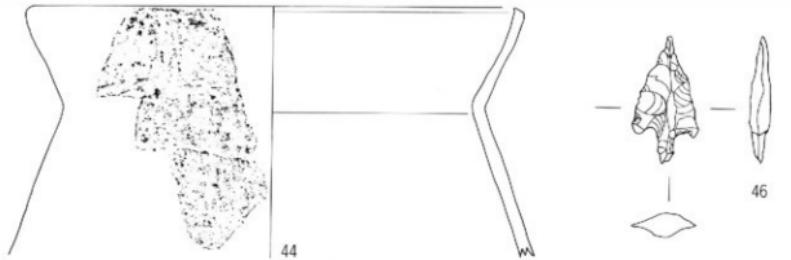
第6図 出土遺物実測図 (1/3)



第7図 出土遺物実測図 (1/3)



第8図 出土遺物実測図 (1／3)



第9図 出土遺物実測図 44・45 (1/3)、46 (実大)、47~50 (1/2)

4 まとめ

ここでは、出土遺物に関して判明した点と、これまでに当遺跡内で行われた他の発掘調査事例なども参考としてまとめてみたい。

(1) 出土遺物について

出土遺物のうち、弥生時代に属する遺物は、石鎚1点を含む石器数点、在地の櫛描文を施す小形甕の1点、天王山式系統の上器37個体分である。(ただし、個体数については、接合しない底部は除外し、小破片であっても文様、胎土等で区別されるものはカウント対象とした。)

今回調査をおこなった約200m²の調査区のなかで、遺物はある程度まとまりをもって出土している。しかしながら、遺物はすべて包含層からの出土であり、遺構との関連性については明確ではない。この包含層から櫛描文を施す在地の弥生中期の小形甕が出土しているが、近世以降の溝S D01近くで出土している点を考慮すると、混入の可能性も考えられる。また、周辺で行われた能越自動車道関連の発掘調査では、天王山式系統の土器が弥生時代後期～終末期の包含層から少量出土していることが報告されている。

当調査区出土の天王山式土器について石川日出志氏は、典型的な天王山式土器を中心として前後に1段階づつ、計3段階にわたる型式学的な相違がある可能性を指摘されている。(詳細は附章を参照していただきたい。)

(2) 下老子笹川遺跡の範囲について—ムラの境界と遺跡の立地—

これまで調査の概要を記述してきたが、ここでは周辺で行われた能越自動車道関連の発掘調査成果と人正10年に作成された地籍図を資料として、ムラの境界と下老子笹川遺跡の範囲について考えてみることにする。

遺跡の現地形は水田が大部分を占め、圃場整備を受けていることもあり、平坦な地形が広がっている。標高は北に向かってゆるやかな傾斜をたどるが、荒又川の周辺は他に比べて1段低くなっている。一方、圃場整備以前の地形を表す地籍図(第10図)をみてみると、等高線は北へ向かってゆるやかな傾斜をたどり、西にはきつい傾斜を伴う谷部がある。旧荒又川はこの谷地形に沿って、蛇行しながら流れている。旧荒又川は改修を受けて直線的な川に姿を変えたが、北にむけてゆるやかに傾斜する地形は、現況と大きく変化したものではないようである。

次に字名に着目してみる。調査地付近より東は上田(アゲタ)と記されており、西へ行くにつれて土倉、川原島と変化する。このうち土倉・川原島には、島や川原といった小字名をもつ場所が記入できないほど密集している。こうした小字名の分布は、上地に対する意識を反映しており、上田に集られた集落住民の空間認識が荒又川周辺に向けられていたことが分かる。島という字名は微高地を指している場合が多く、自然流路に中洲が点在する地形であったことを想定させる。こうした等高線の在り方や字名の分布に加え、集落の境界を示す寺社・火葬場・墓地の位置と発掘調査により判明した溝の位置から集落の範囲を想定してみる。

まず、本遺跡の主体を成す弥生時代後期から終末期の集落跡の位置を、能越道の調査結果をもとに地籍図上に落としてみた。調査地の東約150m程のところでは、弥生時代終末期にあたる集落中心部が検出されている^⑨。この集落は幅1～3.5mの溝S D301とS D202によって南北が区画されている。地籍図からは、S D301・S D202と完全に一致する水路は確認できない。しかし、それぞれの区画溝が存在する場所には、A・B水路があり何らかのつながりがあるのかもしれない。この能越道の延長上では、弥生時代後期の大規模な集落跡も検出されている^⑩。集落跡は幅5～7mの溝を挟んで2つの群に分かれるとされているが、地籍図上では確認できない。また、この集落の東では、幅30mの自然流路も検出されている。この自然流路は地籍図上で確認することができ、現在、中川と呼ばれている流路であると思われる。南側住居群の西では、溝S D122が検出されている。このS D122は地籍図上ではE水路として確認できる。集落と時期的にリンクする、弥生時代後期から古墳時代中期の水田跡も検出されている。水田中央には南北に自然流路が流れおり、この流路を基幹水路とした水田に伴う水路と考えられる溝もいくつか検出されている。基幹

水路と考えられる自然流路はD水路に、また溝S D10IはC水路として地籍図上で確認できる。以上の点から、地籍図が比較的古い地形を止めている可能性の高いことが予想される。

一方、弥生時代の集落が検出された場所の西に位置する調査区では、近世～近代の集落がみつかっている。また、本考察において、境界川として位置付けている、諏訪社東脇を流れる流路の上流部分も近世の川跡として検出されている。調査の結果、「川を境に西側の低地部分では遺構の密度が希薄で、遺構にも焼骨の入った土坑が含まれるなど、東側の居住区とは異なった空間として利用しており、火葬場とも捉えられる集石を伴う土坑1基と、これに付属すると考えられる小規模な建物1棟を検出した」と報告されている³⁹。こうした類例は中世の集落遺跡である富山県福光町の梅原安丸遺跡にあり、村境（集落境）として川が境界の役割をもち、それが現在も変わらず機能していること。河原で検出された土坑が、火葬場に関連する施設と考えられることが報告されている⁴⁰。集落境界の川、火葬場の可能性がある河原の土坑など本遺跡との共通性が指摘できよう。地籍図上では、字川原島に火葬場が記されている。現在、この火葬場は墓地となっているが、境界意識が薄れた現在でも、当時の境界意識が残っている例としてとらえることができる。ところで、集落とは、まとまりをもって生活している基礎的な集団であり、民俗学でいう『ムラ』に相当すると考えられる。こうしたムラは、地図上の村の境界の内側に、ムラ人が考えるムラ境をもっている。福田アジョはムラの領域について、ムラ（集落）一ノラ（耕地）一ヤマ（林野）から成る3重同心円構造の村落空間モデルを示している⁴¹。そして、ムラ境は集落のすぐ外側にあり、ムラ境の外側は田畠が広がるとしている。坪井洋文は、こうしたムラ境に川・海・山・坂といった地形が存在する点を指摘している⁴²。このような場所は、虫送りの送り場や神仏が祠られるなど靈的要素の強い場所となることが多い。

下老子ムラの境界川は荒又川と合流しているが、合流地点の八幡宮付近には、墓地が存在しており、ここが北のムラ境であったと考えられる。地元の人によれば、下老子集落の虫送りはこの八幡宮で行われていたそうである。一方、調査地が隸する下老子地区と南に位置する一步二歩地区との字境は、法蓮寺の北側を東西に横切っており、諏訪社が下老子地内、法蓮寺は一步二歩地内となる。この字境上には墓地が点在しており、ムラ境と字境が一致しているものと考えられる。一步二歩集落は、近世初めには一步村と二歩村の二つに分かれていた。両村の境界付近には、五社祠と清光庵（1954年清光寺となる）がある。近世末期に創建された清光庵の伝承によると、この地は元来沼地では化物の他のごとくみられていたことから、これを清淨たらしめるために創建したと伝えている。地図上ではこの付近が2つの流路の湧水地となっており、この伝承の様子が読み取れる。また、こうしたムラ境が化け物の他、すなわち異界と認識されていた点は興味深い。そして、この場所は下老子笛川遺跡の南端部にあたる。こうしたムラ境から、本遺跡の範囲を考えると、諏訪社東脇の流路を西限とし、八幡宮あたりが北限と考えられる。しかし、南限については旧二歩村地内まで広がっている可能性が高いものと思われる。

また、下老子笛川遺跡内で時代別に集落位置を並べてみると、時代が下るにつれて西へむかって移動する様子が読みとれる。こうした動きは、等高線の上では微高地から低地へ移動していることになる。このような集落の移動に伴う要因として、水利や交通の便といった地理的要因が考えられる。水利では、水が南から北に向かって流れること、荒又川の存在などが指摘でき、水田域の拡大を行うためには、集落は西から東へ移るほかに場所がないという地形的制約を受けているといえる。この結果、西に移動してきたのが現在の下老子集落であると思われる。一方、交通については地籍図上で読み取れる範囲内として、五社祠脇を東西に走る道路と調査地の西を南北に走る道路の存在が大きいと考えられるが、この道路がいつから存在していたのか定かでないため、集落と道路の関係については推定の域をでない。

以上、ムラの境界の形態的特徴をつかむことは、各時代における集落の位置を特定するのみでなく、遺跡の範囲を仮定する際に大きな力を発揮するのではないだろうか。遺跡の立地は、地理的要因に左右される場合が多いと考えるなら、地形的な特徴に視点を置いた研究は不可欠なものと思われる。



第10図 大正10年作成地籍図 (1 / 5,000)

引用文献

- (1) 富山県文化振興財団 1997 『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』
- (2) 富山県文化振興財団 1993 『能越自動車道関係埋蔵文化財泡蔵地調査報告－小矢部市～福岡町間－』
- (3) 富山県文化振興財団 1997 『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』
- (4) 富山県文化振興財団 1998 『下老子笹川遺跡現地説明会資料』
- (5) 富山県文化振興財団 1996 『埋蔵文化財年報(7)』
- (6) 酒井聖子 1991 「梅原安丸遺跡の土坑について」『埋蔵文化財年報(3)』富山県文化振興財団
- (7) 福田アジョ 1984 「民俗の母体としてのムラ」『村と村人』日本民俗文化大系8
- (8) 坪井洋文 1986 『民俗再考』日本エディタースクール出版部

参考文献

- 1 石川日出志 1988 「飛神十二神遺跡の天王山式土器と石器」『北越考古学』創刊号
- 2 石川日出志 1989 「長岡市堅正寺遺跡の弥生式土器と石器」『北越考古学』2
- 3 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』3
- 4 市田半太郎 1960 「志賀沢遺跡発掘調査報告」『秋大史学』9
- 5 伊藤信雄 1960 「東北北部の弥生式土器」『文化』24-1
- 6 伊藤信雄 1979 『辰馬考古資料館 考古学研究紀要1』辰馬考古資料館
- 7 上野 章 1974 「高岡市頭川遺跡」『大境』5
- 8 大木直枝・中村五郎 1970 「山草荷2式土器について」『信濃』22-9
- 9 岡本孝之 1974 「東日本先史時代末期の評価(1)～(5)」『月刊考古学ジャーナル』97、98、99、101、102
- 10 上市町教育委員会 1982 「北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編」
- 11 佐原 真 1983 「弥生土器Ⅱ」ニューサイエンス社
- 12 繩文文化検討会 1988 「東北地方の弥生式土器の編年について」『第2回 繩文文化検討会シンポジウム』
- 13 須藤 隆 1983 「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢I』
- 14 須藤 隆 1970 「秋田県人曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』33-3
- 15 関 雅之 1972 『竪前遺跡』新潟県村上市教育委員会
- 16 大門町教育委員会 1990 「布日沢北遺跡発掘調査概要」
- 17 楠 善光 1975 「東北北部の弥生式土器文化(上)(下)－岡本論文への批判を含めて－」『月刊考古学ジャーナル』106、107
- 18 立山町教育委員会 1987 「辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要」
- 19 坪井清足 1953 「福島県天王山遺跡の弥生式土器－東日本弥生式文化の性格」『史林』36-1
- 20 富山県教育委員会 1979 『富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要』
- 21 富山県教育委員会 1985 『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第7次緊急発掘調査概要』
- 22 豊島 昂 1967 「弥生式文化」『秋田県の考古学』
- 23 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』
- 24 中村五郎 1983 「東北中・南部と新潟」『三世紀の考古学』下巻
- 25 橋本澄夫 1975 「入門講座・弥生土器－中部：北陸1～4」『月刊考古学ジャーナル』106、107、109、111

附章 下老子笹川遺跡の天王山式土器

石川 日出志

本遺跡では、調査区東南部の包含層約15×10m程の範囲から、東北地方を主たる分布圏とする天王山式系統の土器が出土しており、北陸でのまとまった出土例として注目される。45点の拓本と写真を拝見した範囲内で読み取れた特徴と、そのことが示す問題の一端に触れよう。

天王山式土器は、福島県白河市天王山遺跡出土土器を標式として設定された土器形式で、東北地方一円から新潟県北部にかけて分布する。壺・甕・高杯・浅鉢・鉢・注口付・片口付などの器種があり、いずれも縄文を地文として細めの沈線で各種構図を描く。特に縄文はR Lが主で条が継続する例が多いことや、文様帶の境界部分に交互刺突文を施す、といった特徴がある。東北地方では弥生土器形式編年上の位置は確定済みだが、北陸と対比した場合に弥生中期後半、後期前半のいずれと考えるか、意見が分かれている（石川1990）。筆者は後期前半に中心があると考えるが、異なる見解が並立する主たる原因是、北陸で出土する天王山式が北陸在地土器のいずれと共存するのか決定的な証拠を欠いているところにある。したがって、同じ遺跡で天王山式と北陸在地土器の両者が出土したとしても、はたして当時集落内で同時に共存していたのかさえ確定である。このことはまた、天王山式という東北系統の土器をもちいた人々の南下がどのような背景に基づくのかという問題とも直結する。

下老子笹川遺跡で出土した天王山式系統の土器をみて気付くことの第一は、甕の頸部文様帶に重菱形文が明瞭な点（6～9・21～26）がある。これは中期後半の宇津ノ台式土器の伝統で、天王山式土器でも東北地方の日本海側に特徴的な構図である。また北陸の弥生土器とは異なる細かなハケメ調整も日本海側ないし新潟県北部にみられる手法である。ところで、この重菱形文には、描線が太くや間隔があく一群と、描線が細く浅い密な一群があり、前者は秋田県はりま館遺跡など天王山式直前形式に、後者は典型天王山式に特徴的である（1990）。そして、描線が太い6～9では、典型天王山式で多用される頸部文様帶上下区画部の交互刺突がなく、7では頸部文様帶の下段には、天王山式特有の下開き連弧文ではなく、波状もしくは鋸齒状文が描かれている。5も、頸部は無文だが、頸部文様帶の区画線・下段は6～9と同様で、2～4もその延長線上で理解できる。つまり、天王山式直前に遡る可能性がある一群を含んでいることになる。胸部文様が明確なのは豪形土器の17～20だけである。17は横長の菱形を重ねた構図どうしが接する部分を縱長のレンズ形とし、その中央に波状文を充填する。18・20が重弧文・平行線文の間に背中合せの弧線一对を配することも、胴部文様帶上区画部に交互刺突を施す点とともに、典型天王山式の特徴である。

次に口縁部をみると、文様帶区画部の交互刺突や口端の密な刻み、文様帶内の連弧文や波状文といった典型天王山式に合致する一群（11～16・19・21）と、交互刺突や口端外縫の刻みがなく、口縁部文様も粗大ないし簡略化した一群（37～43）の2群があることに気付く。後者は新潟市六地山遺跡など典型天王山式土器に後続する一群に近い。したがって本遺跡出土の天王山式系統の土器は、形式的には3段階にわたるものと見らる可能性が高い。

天王山式系統の土器は北陸でも点々と確認されている。北陸南部の石川県加賀市大野山遺跡や、未発表ながら最近では福井県でも検出されており、さらに大阪府高槻市芝生遺跡では天王山式土器に特徴的なアメリカ式石錐にアスファルトが付着した例がある。大野山遺跡は破片が1点のみ採集されているが、その頸部には本遺跡21と同種の文様が描かれているように、北陸出土例はいずれも重菱形文が明瞭な東北日本海側の天王山式と共通する要素が明瞭である。また、石川県内出土例の多くは1遺跡で土器片が1～数点出土するのみなのに対して、富山県内では、本遺跡の北約5kmにある高岡市頑川遺跡（上野1974）や上市町飯坂遺跡、江上A・B遺跡（岸本ほか1982）、魚津市佐伯遺跡（上野ほか1985）など各所で十数～数十点出土している違いがある^⑩。このうち頑川遺跡の天王山式土器は東北方面と共通する例がほとんどである点で本遺跡と共通し、一方他の遺跡は器形と装飾に変容が認められる例を含んでいる。ただし、飯坂遺跡や江上B遺跡といった後者資料の多くは、口縁部文様帶下端に父兄刺突の替わりに押庄を加え、文様帶に簡略化された文様を描くか縄文のみの一群であって、いまだ六地山遺跡以外日本海側では実態が明らかでない踏顛

大山段階（天王山式に後続）と関係する可能性もあり、ただちに存地化と判断してしまう訳にもいかない。また、佐伯遺跡では、天王山式直前と思われる例を含み、本遺跡が特異な事例でないことがわかる。

本遺跡の特徴として、天王山式系統の土器が北陸在地土器を伴わずほぼ単純な形で存在することが明らかな点も重要な点である。唯一撚の1のみが櫛描き文をもつ土器であるが、位置付けは容易ではない。櫛描き文であることから小松式と見てしまいがちであるが、頸部が「く」の字形に折れ、口縁が直線的に外傾する器形と、さらに櫛描き文も胴部上端に簾状文を1帯巡らし、その下に波状文を2帯廻き、その波状文も鋸歯状を呈しており、小松式の範疇を逸脱しているように思われる。小松式の簾状文は直線文と併用される率が圧倒的に高く、もちろん波状文や短斜線文や扇状文とも併用されるが、その場合は直線文も組合せ、交互に配置するのが一般的である。簾状文の下に波状文を重ねる構図がもっとも多用されるのは中部高地北部の中期後半の栗林式で～後期の箱清水式で、口唇部に繩文や刻みがないことと口縁部が短い点は後期初頭の吉田式～箱清水式の古い部分あたりに近い。しかし鋸歯状の波状文は中部高地にはみられず、新潟北部の山草荷式の甕に似た例があるものの、それでは今後は簾状文を小松式要素の取り込みと見なければならなくなる。難しい土器である。しかし、この一点以外すべて天王山式系統の上器である。北陸中部で天王山式系統の土器が主体を占める例として本遺跡が特異な例であるようにみえる。しかしそれは、從来先駆的に北陸在地土器に伴うであろうと見ていたがためのことであって、典型天王山式を後期初めと考える立場から資料をみると、頭川遺跡・飯坂遺跡なども天王山式系土器単純の段階があると考えることもできる。

北陸の土器とは形式学的にまったく繋りのないこれら東北系上器が出土する背景には、これをもちいた人々の彼地からの移動が考えられる。北陸地方に広く検出例があり、土器が数段階にわたる可能性が高いことは、天王山系集団の移動が偶発的ではなくて、恒常的・継続的であったことを示している。しかし上器の出土量が少ないからそれは小規模であって、集団移住といった性格のものよりもむしろ交易といった経済活動の一環と考えるべきであろう。天王山式土器が中期後半、後期前半のいずれであろうと、東日本の広い範囲を含めて鉄製品が急速に普及し、物資の広域流通機構が整備されていく段階にあたっている。中期後半には北陸産の碧玉質凝灰岩・鉄石英製管玉が東北地方から北海道の石狩低地まで広く普及しているし、小松式土器の要素も更北の日本海側を中心に取り込まれている。こうした北陸側の働きかけに対する対応のひとつとして天王山式土器の南下現象を理解することができると言える。

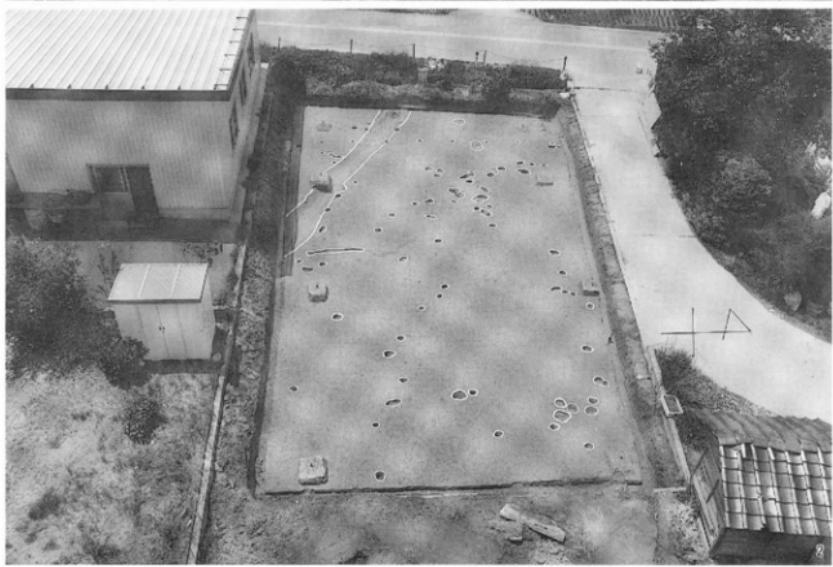
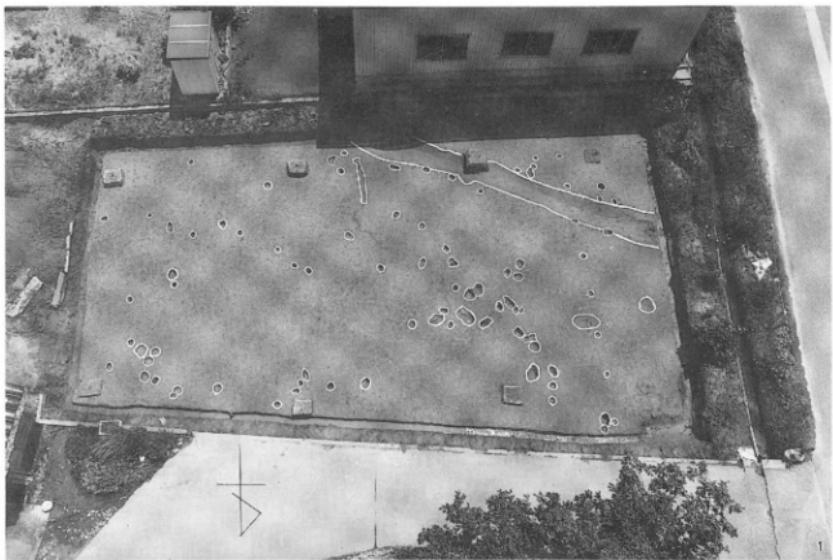
では、北陸在来の集団とはどのような関係だったのであろうか。頭川遺跡と本遺跡では天王山式がほぼ単純に出土しており、北陸在来集団の村落内の一角に外来の交易者が住まう状況とは異なるよう思える。ただ、この問題を解くには、北陸在来土器との編年対比の確定はもちろん、天王山式系統の土器が各遺跡でどのような存在の仕方をするのか、天王山併行期の在地集団の集落景観の把握などを念入に進めていく必要があろう。

天王山式系統の土器の北陸地方への進出は、弥生時代後半期における日本海沿いを舞台とした広域にわたる活動のひとこまとして、興味ある問題である。

【注1】ただし破片数でなく、個体識別したうえで比較しても、有為の差異があるかは今後の検討課題である。

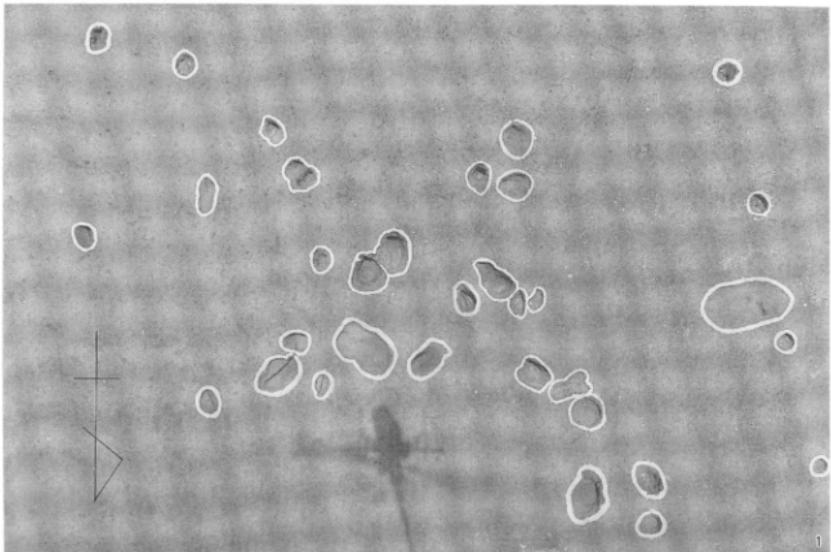
【参考文献】

- 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』3、pp.1-20.
上野 章 1974 「高岡市頭川遺跡」『大境』5、pp.56-68.
上野章ほか 1985 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第7次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
岸本雅敏・久々忠義・橋本正春ほか 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告：上市町土器・石器編』富山県教育委員会.



図版1

1. 調査区全景（上から） 2. 同（東から）



1



2



3

図版 2

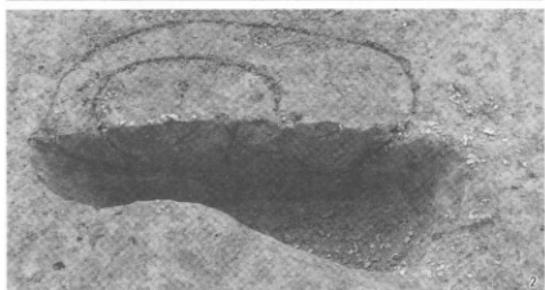
1. 濃横集中地区（上から） 2. 調査区西壁（東から） 3. 調査区南壁（北から）



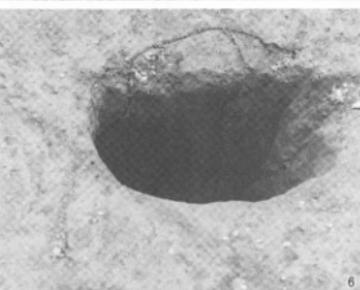
1



5



2



6



3



7



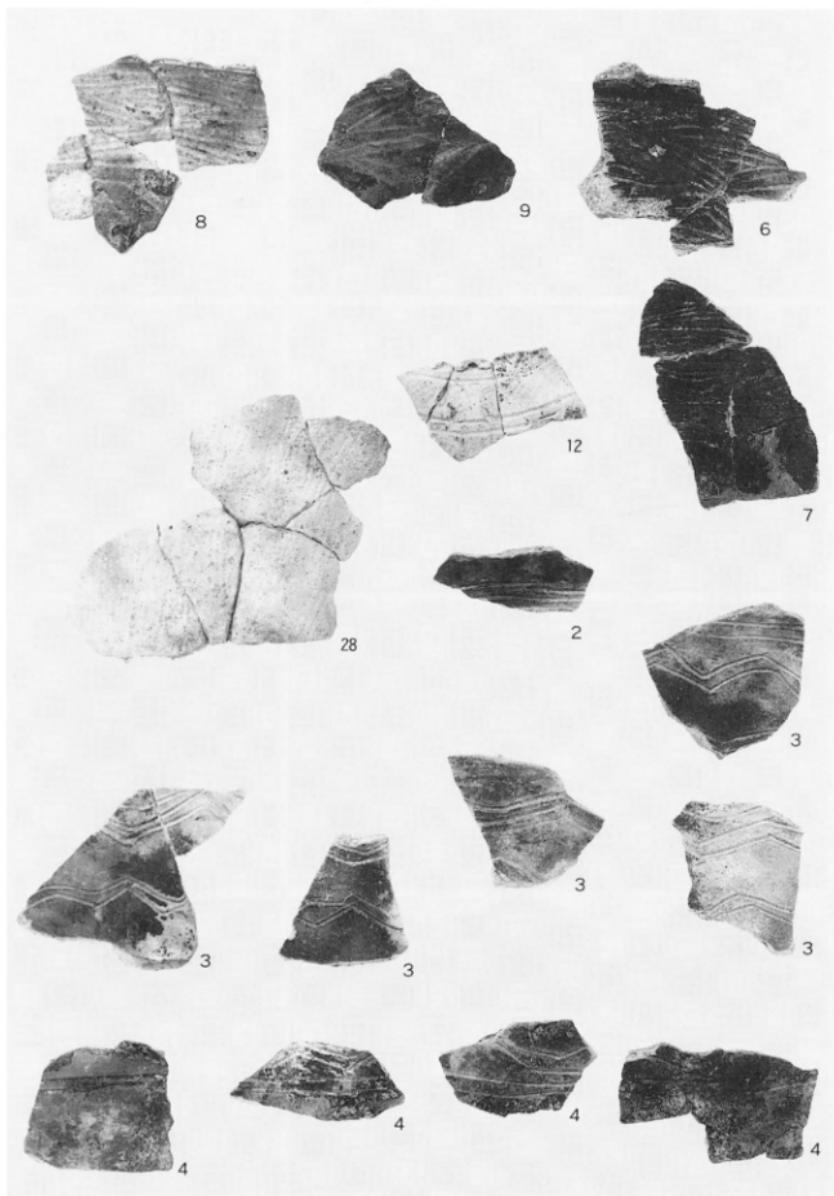
4



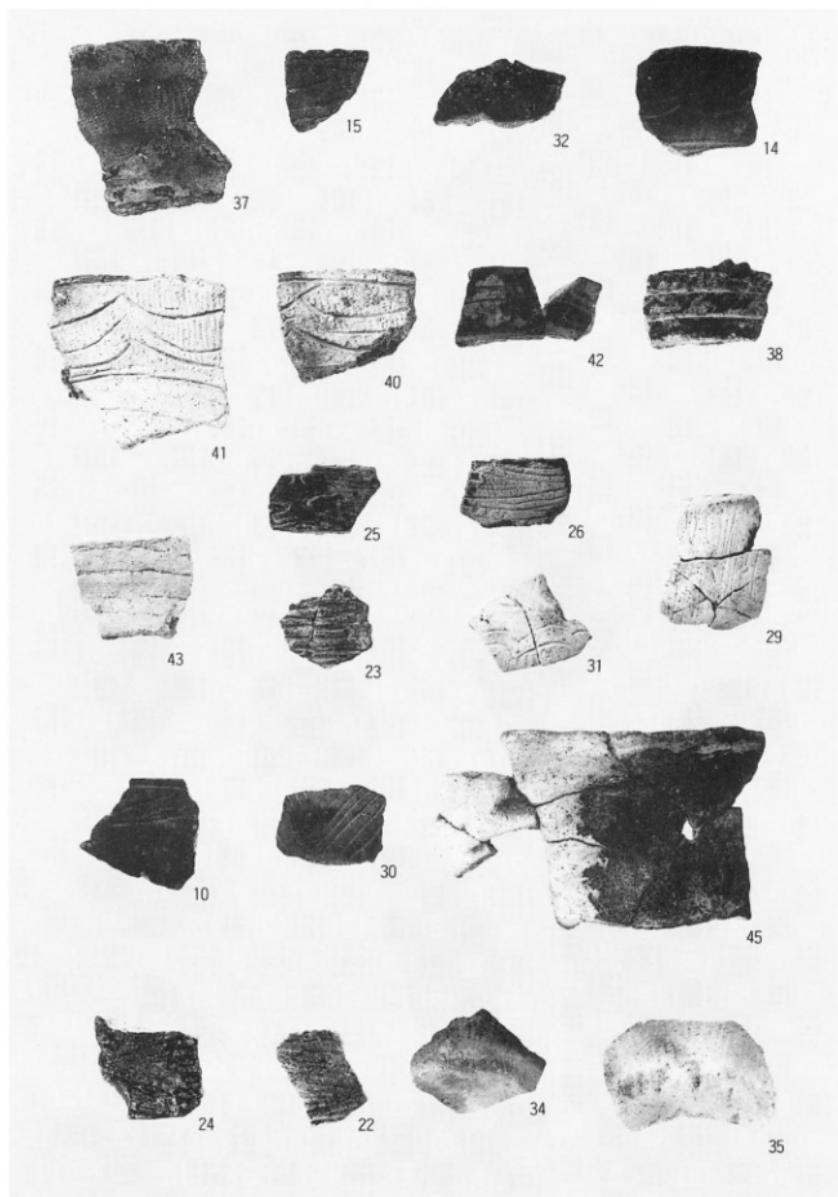
8

図版 3

1. SP55 (西から) 2. SP76 (西から) 3. 噉砂 (西から) 4. 作業風景
5. SP24 (西から) 6. SP89 (西から) 7. SP98 (西から) 8. 遺物出土状況



図版4
出土遺物　※数字は実測番号



図版5
出土遺物



44



44



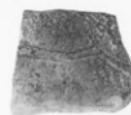
13



16



27



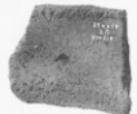
36



13



16



36



27



5



21



11



19



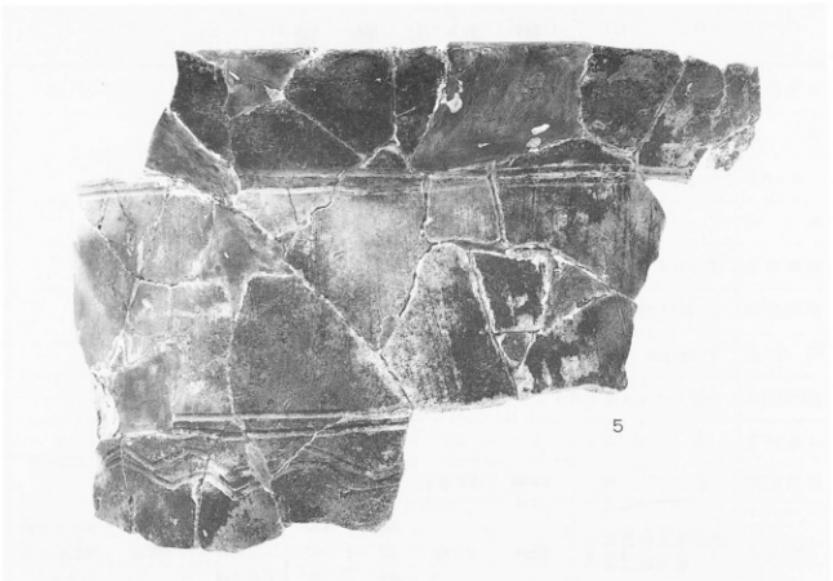
18



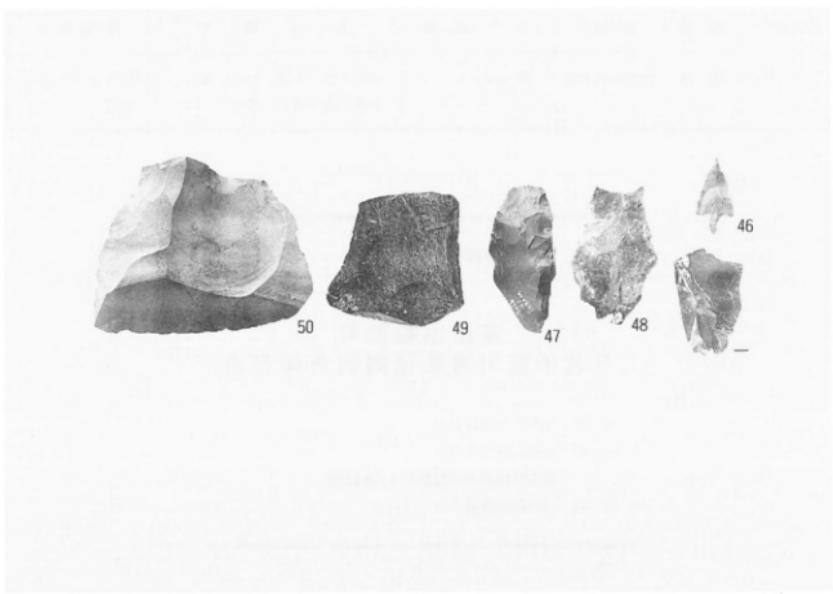
17

図版 6

出土遺物 牽下段、左側は寰頸部ハケメ、右側は交互刺突文（ともに縮尺関係無し）



5



46



47



48



49



50

圖版 7
出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とやまけん ふくおかまち しもおいごさがわいせき はくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山県福岡町下老子笹川遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告書							
番号	7							
編集者名	栗山雅夫							
編集機関	福岡町教育委員会							
所在地	〒939-0132 富山県西砺波郡福岡町大流44番地 TEL 0766-64-5333							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 綏	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
下老子笹川	富山県西砺波郡 福岡町下老子	市町村 16224	遺跡番号 422072	36° 42' 30"	136° 57' 30"	1997年 5月15日～ 6月10日	200m ²	個人住宅建 築に係る事 前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
下老子笹川	集 落	弥生時代後期	溝・ピット	弥生土器、石鎚、剥片、瀬戸・ 美濃、越中瀬戸、伊万里			天王山式土器が 出土	

平成10年3月31日発行

富山県福岡町 下老子笹川遺跡発掘調査報告書

編集 福岡町教育委員会
 発行 福岡町教育委員会
 富山県西砺波郡福岡町大流44番地
 印刷 日興印刷株式会社